

花名の話題（その3）：愛おしい花名

TI

HPに花図鑑を作ったことが機縁となり、これまでに2稿の「花名の話題」を投稿しています。花名の多くは、その花姿の特質や印象から付けられています。今回は前投稿の続編で、愛（いと）おしい名前の花を紹介します。

1. ユウゲショウ（夕化粧）

図1がユウゲショウ（夕化粧）の花です。明治時代に観賞用として移入されたものが日本全国に野生化しており、道端や空き地でもよく見られます。5～9月にかけて、茎上部の葉の脇から薄紅色で直径1 - 1.5cmの花をつけます。和名の由来は、午後遅くに開花して、艶っぽい花色を持つことからとされていますが、実際には昼間でも開花した花が見られます。花弁は4枚で紅色の脈があり、中心部は黄緑色です。やや紅を帯びた白色の葯（やく：花粉を入れている袋状部分）を付ける雄蕊（ゆうすい：おしべ）が8本あり、雌蕊（しすい：めしべ）の先端は紅色で4裂しています。



図1 ユウゲショウ（夕化粧）

これとよく似た花にヒルザキツキミソウ（昼咲月見草）（図2参照）があります。こちらは花が大きく4-5cmくらいあります。また、夜だけでなく昼間も開いているツキミソウということで花名が付いています。



図2 ヒルザキツキミソウ（昼咲月見草）



図3 オシロイバナ（白粉花、白粧花）

さて、ユウゲショウ（夕化粧）にもどりましょう。この花のイメージは、団扇片手に藍浴衣（あいゆかた）姿の娘さん（温泉後で未だ頬が赤っぽい）でしょうか。花名からは、夕方に出会う艶っぽく化粧した花街の芸子さんが連想されます。藍浴衣姿の娘さんと花街の芸子さんとの違いはあるもののいずれも愛おしく、花名は花姿を上手く言い得ていると思います。皆さんにとって、花名からイメージした花姿は実姿に近かったでしょうか？

「ユウゲショウ（夕化粧）」は、別の花である「オシロイバナ（白粉花、白粧花）（図3参照）」の通称でもあり紛らわしくなっています。そのため、アカバナ（赤花）を接頭語にして「アカバナユウゲショウ（赤花夕化粧）」と呼んで区別化されていることもあります。

オシロイバナ（白粉花）は、野生化しておりよく見かけます。花は夕方から翌日10時頃まで開いており、ほのかな芳香があります。花色は、赤、黄色、白などで絞り模様（同じ株で複数色もあり）もあります。ただ、ユウゲショウ（夕化粧）のような艶っぽい化粧のピンク色とは異なっています。混色の絞り模様（図3参照）は、ビニール傘の傘模様にしたくなりますね。楽しそうじゃないですか。オシロイバナの名前の由来は、黒いタネの中にある胚乳が白粉（おしろい）のような白い粉であることだそうです。

香西かおりさんが歌う「夕化粧」は、「オシロイバナ」の花言葉です。夕方に咲き場所によって色を変える花になぞらえ、女心と共に少しせつない恋心を歌ったものです。

.....

日の暮れにそっと 風に寄り添う様な

夕化粧の姿に似て 華やぐ恋
差し出された手を取れば あなたの彩に染められ
満ちてく刹那(しあわせ)

2. ルリヒエンソウ（瑠璃飛燕草）

燕が飛んでいるような花姿で瑠璃色であるという名のルリヒエンソウ（瑠璃飛燕草）は、いかがでしょうか。瑠璃色とは、宝石「瑠璃」の色で藍青色/深い青/コバルトブルーです。本来「瑠璃」とは仏教世界の中心にそびえ立つ須弥山（しゅみさん）で産出される宝石で、仏教の七宝の一つ。その宝石の色にちなんだ瑠璃色も至上の色として神聖視されました。孫が遊ぶ「いろはかるた（江戸版）」にも、「瑠璃もはりも照らせば光る」と出てきます。ここの「はり」は「玻璃」で水晶のことです。瑠璃色に関して、日本の伝統色・和色における色見本例（カラーコード：＃1e50a2）を図4左部に示します。花名にある瑠璃色（日本の伝統色・和色における見本カラーコード：＃1e50a2）と飛燕とから思い浮かべる花姿は、図4右部のようなものでしょうか。



図4 花名「ルリヒエンソウ（瑠璃飛燕草）」の瑠璃色と飛燕とから思い浮かべる花姿



図5 ルリヒエンソウ（瑠璃飛燕草）

瑠璃飛燕草（HP）の実際の花写真例を図5に示します。実の花姿は、思い浮かべたものに近いでしょうか。写真において、花の後ろ側に長く伸びている巨（きょ：蜜を貯めるところ）は、ひゅっと飛んで来ている燕の尾羽や飛跡をイメージさせます。花は、雨露に濡れています。花の色は、青紫色の爽やかな飛燕の姿であり、とても愛おしいです。花の色は、青紫が一般的ですがピンクやブルー八重咲きの品種もあるそうです。

ルリヒエンソウ（瑠璃飛燕草）は、植物分類ではヒエンソウ属に属しています。この属には、世界に約360の種があるそうです。HP花図鑑に載せている[オオバナヒエンソウ（大花飛燕草）](#)や[セリバヒエンソウ（芹葉飛燕草）](#)は、ここに含まれる種です。花姿「ヒエン（飛燕）」の多様性の一端がみられます。

3. ヒメ（姫）を接頭語に持つ花

ヒメ（姫）とは、基本の種より小さくかわいいものにつけられる接頭語としての用いられるのが一般的です。特別なケースとして、基本種の属名と異なっても花が似ているという観点で用いられることがあります。逆に、基本の種より大きいものにつけられる接頭語に、オニ（鬼）があります。花は基本的には美しいものであり、ヒメ（姫）を接頭語に持つ花はより愛おしいものとなります。その代表花例がHP花図鑑にいくつか載っており、図6にて紹介します。



a) [ヒメウツギ（姫空木）](#)



b) [ヒメエニシダ（姫金雀枝）](#)



c) [ヒメキンギョソウ（姫金魚草）](#)



d) [ヒメヒオウギ（姫檜扇）](#)



e) [ヒメヒオウギズイセン](#)
（姫檜扇水仙）



f) [ヒメリュウキンカ](#)
（姫立金花）

図6 ヒメ（姫）を接頭語に持つ花（from HP）

4. イヌ（犬）を接頭語に持つ花

花名に付く接頭語に「イヌ（犬）」もあります。HP花図鑑の花では、[イヌガラシ（犬芥子）](#)、[イヌコウジュ（犬香薷）](#)、[イヌサフラン（犬サフラン）](#)、[イヌタデ（犬蓼）](#)、[イヌビエ（犬稗）](#)、[イヌホオズキ（犬酸漿）](#)が相当します。この場合の接頭語「イヌ」は否（イナ）が訛ったものだそうです。したがって、「イヌ（犬）+ 基本種名」は、基本種によく似ているが実は違う、または役に立たない植物を表しています。

つまり、花名「イヌガラシ」はカラシナに似て非なるもの、「イヌコウジュ」は役に立たないとの意味で犬を冠した香薷、「イヌサフラン」はサフランに似ているが食材として役に立たないこと、「イヌタデ」はヤナギタデに対し葉に辛味がなくて役に立たないこと、「イヌビエ」は栽培されているヒエ（稗）に似ているが食料にならないと言う理由、そして「イヌホオズキ」はホオズキに似ているが花も実もガクも異なっていること、に由来しています。

接頭語のイヌ（犬）は、犬を役に立たない代表動物として誤解させるものであり、犬にはとてもとても気の毒です。

HP花図鑑には、「[イヌバラ（犬薔薇）](#)〈英名：Dog rose〉」も載っています。花名は、ローマ時代にこの野ばらが狂犬病にかかった犬の咬み傷に効果があると推奨されたことに由来しています。「イヌ（犬）」に否の意味はありません。

5. 余談：献名（けんめい）

献名（けんめい）とは、生物の命名に際して特定の人物の名前を織り込むことです。生物の種を記載し学名を命名するのに際して、しばしば命名者が特定の人物に敬意を表して名前を織り込む慣行があります。

献名の対象となる人物は、記載された種を採集して命名者に提供した人物であることが多くあります。しかし、命名者が個人的に恩義を感じている人物、あるいは命名者が尊敬する人物であることも稀ではありません。これは分類学的研究に多大な経済援助が必要であった19世紀に、研究者が援助者への謝意を示すために行ったものが慣例として残ったと言われています。

（from [ウィキペディア：献名](#)）

生物学における学名（がくめい）は、生物学の手続きに基づき、世界共通で生物の分類群に付けられる名称です。種の学名は種名（しゅめい）と呼ばれ、[属名（ぞくめい）+種小名（しゅしょうめい）]の構成で表されます。この表し方は二名法（にめいほう）と呼ばれており、「分類学の父」と呼ばれる[カール・フォン・リンネ](#)によって体系化されました。

献名が施されるのは、学名の属名と種小名、または一般名いずれも該当します。世間一般では、分類学者は自分の発見した新種の生物に自分の名を付けると考えられている場合がありますが、そういうことはまずないそうです。したがって、自分の妻/愛人の名を付けることは、とてもとても稀なケースになります。その稀なケース2例を紹介します。

1) 牧野富太郎が命名した「スエコザサ」

前稿で取り上げた植物学者、牧野富太郎博士〔1862（文久2年）-1957（昭和32年）〕は、94年の生涯で約40万の標本を採取、新種など1500以上の植物に名前を付けました。その中の一つ、「スエコザサ」は、博士の妻の名にちなんだものです。

インターネット記事（Ref.1）より、以下を転載します。

▼土佐の造り酒屋に生まれた牧野は、独学で植物を研究。結婚し子どもができて植物に夢中で、家庭を顧みずに野や山を渡り歩いた

▼牧野は金銭にも無頓着で、実家の財産を食いつぶしても、研究への出費は惜しまなかったという。借金苦に耐えながら夫を支え、家族を守ったのが妻の壽衛（すえ）。病に伏した糟糠（そうこう）の妻への感謝を新種のササの名として永遠に残したかったのか

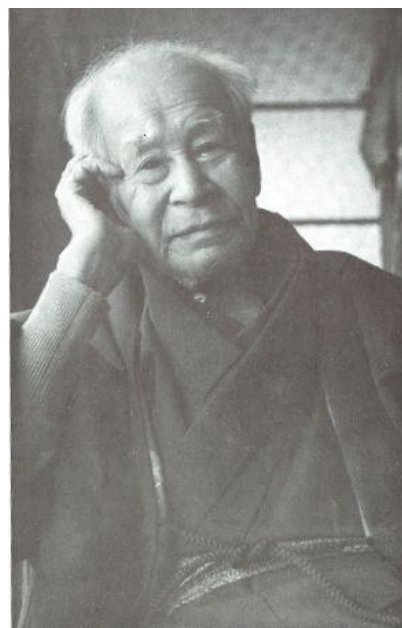


図7 牧野富太郎：88歳
(from Ref.2)

▼牧野は小学校中退ながら、熱意が認められて東京帝大植物学教室への出入りを許され、助手、講師となり、理学博士の学位を得た。全国を歩いて多くの未知の植物に名前を付け、精密な植物図に残した功績は高く評価される。牧野の植物図鑑は今でも研究者必携の書だとか

▼「雑草という名の草はない」。それぞれに花を咲かせ実をつける植物に名前を与え続けた牧野の言葉だ。学歴もない市井の愛好家から日本植物学の泰斗となったその生き方にも重なるように思える。

2) シーボルトが命名した「オタクサ」 (from Ref.3-10)

紫陽花は、いまでは、アメリカ・ヨーロッパ各国などで観賞用に広く栽培され、多くの品種が作り出されていますが、その原産地（原種）は日本です。この日本の美しい紫陽花を世界に紹介して広めたのは、鎖国時代の1823年、オランダ商館の医師として来日したドイツ人シーボルトです。

鎖国下の江戸時代において、長崎の出島で交易を許されたのが、オランダでした。出島にはオランダ商館が置かれ、日本との貿易業務に従事する商館長以下10数名のオランダ人が滞在していました。文政6年（1823）に出島へやってきたシーボルトは、出島に滞在するオランダ人の診察や治療にあたった商館医の1人。

シーボルトの日本での任務は、医師としてオランダ商館員の健康管理にあたること。そして、日本の国土や産物などを詳しく調査し、日本との貿易に役立つ情報の収集をオランダ国東インド政府から与えられていました。シーボルト自身にも、まだ見ぬ土地の自然や風俗、習慣などについて研究したいという強い欲求があり、来日は彼にとって願ってもないチャンスとなったのです。彼はドイツ人ですが、ドイツ語訛りを話すオランダ人と偽って入国しています。

西洋医術を施すシーボルトは、名医との評判が高く、通常は禁止されていた出島の外に出ることを特別に許可され、日本人を診察することもあったといえます。彼は当初、出島の商館医として来日しましたが、滞在一年にして「日本博物誌」を書きあげ、私塾を開校しました。塾長としての講義だけでなく、植物はじめ日本固有の事物を精力的に採集しました。多くの塾生たちも、これに加わったことが知られています。



図8 シーボルト（肖像画）(Ref.8)



図9 お滝さん（肖像画）(Ref.7)

シーボルト（当時27歳）は来日後1カ月の文政6年（1823）8月、出島通いの遊女とされている其扇（そのぎ）と呼ばれる日本人女性・楠本滝（通称お滝さん）（当時16歳）と結ばれます（注1）。彼女に一目惚れしていたシーボルトは、同年11月に故郷の両親に宛てて、

素晴らしく可愛い日本の女性と結婚しました（中略）
お滝さん以外の女性を妻に迎えることは絶対にありません

という手紙を送っています。

やがて二人の間には「お稲」という女の子も生まれ、幸福な日々が過ぎて行きますが、一時帰国しようとしていたシーボルトの荷物から、当時国外への持ち出しが禁じられていた日本地図や葵の紋の羽織などが見つかり、これにより彼にはスパイ容疑がかけられ、1829年にお滝さんとお稲さんを長崎に残したまま、国外追放の身となってしまったのです。

帰国したシーボルトが、お滝さんに宛てたたどたどしい日本語の手紙があります。

日々、私は、お前、また、お稲の名をしばしば言う
いつか、お前を、またお稲を、もっと愛する者を見るのだろうか

お滝さんとお稲の2人に対する愛情が綴られており、会えぬ身ゆえにさらに思いが募り深まっていったのだからことが窺い知れます。

ところが、程なくお滝さんから、

余儀なく義理にて他へ嫁し申候

「他人と結婚はせざるを得ぬが、どうか忘れないで欲しい」

と、親戚の勧めに抗いきれず再婚したことを告げる手紙が届けられます。
自分の肖像を蓋に描かせた煙草入れとともに。

激しく落胆したであろうシーボルト。しかし、たとえ他の男性のものとなっても、シーボルトもお滝さんのことを忘れようとはしませんでした。

帰国後の生涯を「日本学」の研究に捧げようとしていた彼は、その研究成果の中に、お滝さんの面影を留めようとしたのです。1832年、彼が刊行した『日本』という本では、侍、町人、僧侶など、当時の様々な日本人の絵姿が紹介されていますが、その中には、お滝さんの肖像が特に大きく収められています。お滝さんへの愛が真実であり、永遠であるというシーボルトの誓いのようにも思われます。

続いて、シーボルトは、日本の様々な植物を掲載した『日本植物誌』を刊行しています。そこで彼は、長崎の中国寺で採取したという空色の紫陽花を学名「*Hydrangea otaksa*」（ハイドランゼア オタクサ）と名づけて紹介したのです。

残念ながらこの「オタクサ」という名前の花は、後に別の学者により既に名がつけられていた品種だったことが判明し、無効とされてしまいました。

シーボルトは自著の中で **otaksa** を「アジサイが日本で「オタクサ」と呼ばれている」と命名の由来を説明していました。しかし、さらに後年、「日本の植物学の父」と言われた牧野富太郎は、日本国内でこの呼称が確認できなかったことから、シーボルトの愛妾の楠本滝（お滝さん）の名を学名に潜ませたのでは、と推測したのです。ちなみに、「オタクサ」は、ドイツ人シーボルトが妻の名「お滝さん」を呼ぶ時の発音そのままだそうです。牧野富太郎は、シーボルトに対し、「神聖なる学名に自分の情婦の名前をつけるなどけしからん」と憤慨し、激しく非難しています。続いて微生物学者である中村浩も、『植物名の由来』という著書の中で、「愛妻や恋人や情婦の名を後世に残しておきたいというのは人情であろうが、無縁の人の名を憶えさせられることは全く迷惑なこと」とバツサリ！

しかしながら、牧野富太郎は、前章で紹介したように、新種の笹の命名に自らの妻の名「スエコザサ」と名付けています。自己矛盾があるように思えます。それとも、本妻ならよくて花柳界の愛人は駄目と彼は考えていたのでしょうか？

シーボルトの恋の舞台となった長崎では、市の花を紫陽花と定め、今は品種の隔てなく、全ての紫陽花を「おたくさ」あるいは「お滝さん花」とも呼んで、親しんでいます。毎年5月から6月にかけて、街並みを紫陽花で飾る「長崎紫陽花まつり」が開催されています。このお祭りの正式名称は「ながさき おたくさ まつり」。「紫陽花」と表記して「おたくさ」と読むところに、長崎の人々が紫陽花を慈しむ心が感じられます。

注1：出島への出入り

出島への出入りに関して、以下の解説 (Ref.10) があります。

出島の出入り口である出島橋には門番がいて、たえず出入り者を厳しく取り調べたといいます。そこには出島の規則を記した「制札」が立てられていました。

禁制

- 一、 傾城之外、女入事
 - 一、 高野聖之外、出家山伏入事
 - 一、 諸勸進之者、ならびに乞食入事
 - 一、 出島廻ぼうじより内、船乗入事 附 橋之下船乗入事
 - 一、 断なくして、阿蘭陀人出島より外へ出事
- 右条々堅可相守者也

つまり遊女以外の女、高野聖のほかの山伏や僧侶、勧進や乞食の出入り、出島の外周に打ってある棒杭の中、橋の下への船の乗り入れ、そして、オランダ人は許可なく出島からの外出が禁じられていたということです。出島で隔離同然の生活を送っている商館員達は、長崎の町に自由に出かけることは禁止され、目的があれば長崎奉行所や役人に許可を願い出なければなりませんでした。それは、商館医が町を出る時も同様で、奉行所の許可をとるのには丸一日かかったといえます。

出島に住むオランダ人が妻子を連れてくることを許していなかったなかで、遊女の出入りは幕府の認める例外措置でした。長崎には有名な丸山遊郭街（丸山町と寄合町を合わせた範囲）がありました。豪華絢爛で晴れやかな衣裳を身にまとっているのが、鎖国期の丸山遊女の特徴でした。それは、海外貿易で潤う長崎の街ならでのこと。そして丸山遊女最大の特徴は、日本人客のみを相手にする日本行き、主に中国人を相手にする唐館行き、そしてオランダを相手にする阿蘭陀行きの三種別があったことです（Ref.10-13）。

お滝さんは寄合町の遊女屋である引田屋（ひけたや）の遊女、源氏名「其扇（そのおうぎ、そのぎ）」として出島に入り、シーボルトお抱えの遊女（当時16歳）となりました。長崎丸山では、日常は遊廓の外で暮らしながら遊女屋に手数料を払って名義のみを遊女屋に登録し、中国人・オランダ人の接待のみを専門に行なう「仕切り遊女・名付け遊女」と呼ばれる遊女制度がありました。シーボルトはこの遊女制度を利用してお滝さんを出島に抱え込んだと思われるが、詳細はよくわかりません。

参考文献

Ref.1 [きのう取り上げた植物学者、牧野富太郎の話をもう少し… | 【西日本新聞me】
\(nishinippon.co.jp\)](https://www.nishinippon.co.jp)

Ref.2 佐竹義輔 監修、中村浩 編、牧野富太郎植物記1 野の花1 (1974年、あかね書房)

Ref.3 [日本近代医学の父・シーボルト | 長崎で活躍した外国人 ～シーボルトとグラバー～ | 特集 | 長崎市公式観光サイト「あっ！とながさき」 \(at-nagasaki.jp\)](#)

Ref.4 Amebaブログ: [シーボルトさんとお滝さんの「紫陽花とオタクサ」](#)

Ref.5 伊都 美智: [長崎市民に愛される紫陽花。シーボルトの恋に思いを馳せて \(tenki.jp サブリ 2016年06月10日\) - 日本気象協会 tenki.jp](#)

Ref.6 [「オタクサ」という紫陽花 - 小寄道 \(goo.ne.jp\)](#)

Ref.7 [第121回 アジサイ「Otaksa」への思い～其扇（そのぎ）への手紙 | 園藝探偵の本棚 | カルチベ - 農耕と園藝ONLINE \(karuchibe.jp\)](#)

Ref.8 [フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト - Wikipedia](#)

Ref.9 出島370年物語: 出島ゆかりの女たち ([「ナガジン」 \(nagasaki.lg.jp\)](#))

Ref.10 出島370年物語: 商館医が町にもたらしたもの ([「ナガジン」 \(nagasaki.lg.jp\)](#))

Ref.11 石山 禎一, 宮崎 克則: [1830 年3 月帰国途中のシーボルトが其扇に送った手紙 \(seinan-gu.ac.jp\)](#)

pdfファイル版:

<http://repository.seinan-gu.ac.jp/bitstream/handle/123456789/1890/um-v8n1-p3-27-ish.pdf?sequence=1>

Ref.12 [遊女 - Wikipedia](#)

Ref.13 [中川 清: 南蛮菓子と和蘭陀菓子の系譜](#)